2025年2月2日　説教「あなたの敵を愛しなさい」

ルカの福音書6章27～32節

マタイの福音書にある山上の説教（5～7章）に対して、ルカの福音書6章20節からの記事は平地の説教と言われます。内容は重なっているところも多いですが、イエスが同じ事を異なる場面で語ったとしても決して不自然ではありません。平地説教箇所を続けて学びましょう。

１．あなたを侮辱する者のために祈れ（27～28節）

①敵を愛しなさい（27）**「しかし、いま聞いているあなたがたに、わたしはこう言います。あなたの敵を愛しなさい。」**

「幸い」と「哀れ」について、語られたイエスは、新たなるテーマで話されます。ここまでも常識を越えた教えでありましたが、ここに至ってそれは極まります。なんと、「あなたの敵を愛しなさい」と言われるのです。敵はまさに対立し、憎むべき、受け入れられず、忌むべき相手でありましょう。ですから、愛するということは不可能な存在です。ところが、イエスはその敵を愛せよと教えられるのです。ここでの「愛する」ということばは、犠牲的で一方的で見返りを期待しない、神の愛とも訳されるアガペーの愛をもって愛することが促されているのです。

②憎む者に善を（27）**「あなたを憎む者に善を行いなさい。」**

そして27節の後半では、逆に、「あなたを憎む者に善を行いなさい」と教えられます。「あなたを憎む者」という人は、「あなた」を敵としている人と言っても良いでしょう。何故だかはわかりませんが、憎しみに燃えているのです。「あなた」にもそれなりの原因があるかもしれません。しかし、誤解もあるかもしれません。いずれにせよ、憎まれるということはうれしい事では、ありませんから、憎しみで返すこともしばしばです。しかし、イエスはその人に「善を行いなさい」と教えられるのです。その人を受け入れ、その人に喜ばれることを行うということでしょう。

③のろう者を祝福せよ（28）**「あなたをのろう者を祝福しなさい。あなたを侮辱する者のために祈りなさい。」**

「のろう者」は「あなた」を憎み、悪いことが起こることを祈願している人です。しかし、イエスはその人を祝福せよというのです。その人に恵みがあることを願い、幸福があるように願えというのです。さらに、「あなた」を侮辱する者のために祈れと言われます。あなたの欠点をあげつらい、悪口、ののしりの言葉を言う人のために祈れというのです。

２．ほかの頬も向けよ（29～30節）

①頬を打つ者に（29）**「あなたの片方の頬を打つ者には、ほかの頬も向けなさい。」**

他人の頬を打つことまでする人は、相当の憎しみ、恨み、怒りなどがあると考えられます。それが正当なものかどうかはわかりません。しかし、イエスはそれが不当な暴力であったとしても、片方（マタイでは右）の頬を打つ者に対しては、ほかの（マタイでは左）の頬を向けてやりなさいと教えられる

のです。この教えは受け入れられないという人もいるかもしれません。しかし、イエスの教えは一貫としています。次の教えにもつながっていきます。

②上着を奪い取る者に（29）**「上着を奪い取る者には、下着も拒んではいけません。」**

マタイの山上の説教では「あなたを告訴して下着を取ろうとする者には、上着もやりなさい」とあります。上着が先であれ、下着が先であれ、奪い取ろうする者を拒むなといわれるのです。ローマの兵士たちが、十字架上のイエスの着物を分け合ったと出来事を思い出します。

③与えなさい（30）**「すべて求める者には与えなさい。奪い取る者からは取り戻してはいけません。」**

求める者には与え、奪い取る者から取り戻すなと主イエスは言われます。「受けるより与えるほうが幸いである」というイエスのお言葉をパウロは伝えていますが（使徒20:35）、財物であれ、時間であれ、知恵であれ、与えることによる恵みがあることをイエスは示されるのです。

３．自分にしてもらいたいことを（31～32 節）

①人にもそのように（31）**「自分にしてもらいたいと望むとおり、人にもそのようにしなさい。」**

自分にしてもらいたいことを人になす、という教えについて、マタイの山上の説教では、「これが律法であり預言者なのです」（マタイ7:12）という一文が加えられています。旧約聖書全体の教えの凝縮であることを、語ってくださっているのです。誰かにしてもらいたいな願っていることを、してもらったとするなら、私達は喜ぶでしょう。

②自分を愛する者を愛しても（32）**「自分を愛する者を愛したからといって、あなたがたに何の良いところがあるでしょう。」**

自分を犠牲的な愛（アガペーの愛）をもって愛してくれる人を、自分もその愛をもって、愛したとしても、神の恵みは全うされないと、イエスは言われるのです。神の愛が現れるためには、これまでイエスが教えてこられたように、自分に対立してくる人々をも愛そうとする信仰がなければならないのです。「敵を愛しなさい」と言われた主は本気なのです。

③罪人たちでさえ（32）**「罪人たちでさえ、自分を愛する者を愛しています。」**

罪人たちでさえ、自分を愛する者については、どんな犠牲を払っても、見返りを求めずに愛している、と主は言われます。神を認めない人々の愛の価値を主は十分に認めています。しかし、キリストが語らんとするのは、それを越える愛なのです。そのことを学ばなくてもは、福音を理解することができないからです。

《結論》　インド独立の父と言われるガンジーの指導方針は無抵抗主義と言われます。それは、イエス・キリストの教えから影響を受けた部分があったようです。また、ガンジーの思想に共鳴したキング牧師は黒人解放のために、暴力を用いない不服従運動を起こしたのでした。かといって、イエス・キリストの教えが二人の運動の思想とぴったりと合うものかというと、必ずしもそうではなさそうです。もちろん、ガンジーとキング牧師の間にも相違があったのも事実ですし、キング牧師の場合はよりキリストを意識していたことは間違いありません。しかし、キリストが「あなたの敵を愛しなさい」と教えられたとき、政治運動というよりも、極めて日常的に生きる人間の問題が意識されていると考えられるのです。そして、それは人間の罪の問題の最終的に解決の道となる愛のことなのです。もちろん、二人が政治問題、人種問題に道を開くのに、イエスの教えを適用していったことについては、大いに評価されなければならないことは言うまでもありません。

それでは、イエスが「あなたの敵を愛しなさい」「「憎む者に善を行え」「もう片方の頬も出せ」「下着も拒むな」「「与えよ」と教えらえた真意はどこにあるのでしょうか。

ある人は言うでしょう。子供に対して、殴られても抵抗するなと教えたら、いじめられっ子になってしまうとか、侵略してくる国をそのままに許容するならば、やりたい放題になってしまうとか・・・。実践的にはいろいろな課題がこのテーマからは出てきます。今ここでこの課題を別の側面から考えます。「オープン・ドアーズ」という宣教団体の報告によると、現在世界中で３億八千万人を超えるクリスチャンが、その信仰を理由に高いレベルの迫害や差別に直面しているということです。ミャンマー、イエメン、スーダン、アフリカ諸国などではキリスト教徒が標的とされ、殺害されたり、投獄されたりしています。抵抗したり、運動を広げたりすることもできません。

一方、私達が生きる現場においては、見える迫害はなくても、キリスト教信仰に対する、表面ではわからない、粘っこく層の厚い反対があります。そうした現実のなかにクリスチャンとして生きるには、知恵も必要ですが、本当の意味での愛が必要なのではないでしょうか。

私達にはそのような愛はないと引っ込んでしまうのでは、イエスの言われる「あなたの敵を愛しなさい」という教えにはつながりません。私達が「敵を愛するような愛があるのだ」ということを確認することがまず重要です。イエス・キリストは十字架上で、苦痛の真っただ中に「父よ。彼らをお赦しください。彼らは何をしているか、自分でわからずにいるのです」（ルカ23:34）と言われました。ここに、主ご自身が「敵を愛しなさい」というお言葉を実践してくださったのです。迫害があったとしても、キリストを見上げながら生きることが、「敵をも愛する」信仰へと繋がっていくのです。主イエスは、ここで、愛の学びという霊的訓練を弟子達になし、私達にも教えて下さっているのです。自分を十字架につけた人々をも赦してくださった、主イエス・キリストを今週も見上げつつ、「敵をも愛する愛」を学んでいきましょう。